滅する。以上から京都市附近の下水性水域ではアカイエカを専住種とし、汎住種としてトラフカタイカも生育するが、まれに類住的にコガタクロウスカが出現すること、アカイエカは5～12月まで、トラフカタイカは7月中旬から11月上旬まで出現し、後者は一時的にアカイエカ幼虫を圧倒することもあるが、すぐ勢力が衰えて消滅するから、アカイエカの種族維持をそれ程有効に抑圧しているとは考えられないこと等が結論される。

(京都市衛研, 京都市上京保健所)

竹林内墓地微陸水域における蚊相の遷移について: 松尾喜久男 Matuo, K.: On the successions of larvae and pupae of mosquito bred in minute inland waters found at graveyards in the bamboo bush

1954年1月から12月にわたり京都市西南郊の竹林内墓地“あかうけ”に生育する蚊幼虫、蛹相の遷移を調べた。全体として24回にわたり延62水域で採集した蚊幼虫、蛹は総計946個体である。出現した種類を多い順に示すと *Aedes japonicus*, *A. flavopictus*, *Uranotaenia bimaculata*, *A. albopictus*, *Tripteroides bambusa*, *Armigeres subalbatus* の4属6種であつた。各回における各種類の若齢、高齢幼虫並びに蛹の出現率を比較した結果、*A. jap.* は通年核として周年出現し、幼虫越冬性を示している。3月下旬に蛹出現、1月から4月、10月から12月には優占位を占める。*Ura. bim.* も通年核として周年出現して幼虫越冬性を示し、夏季には出現率が低下する。*A. jap.* の蛹は3月下旬、*Ura. bim.* は4月上旬に始めて出現し、冬季における両種の高齢幼虫の発育は全く停止するとみなされる。*A. flav.* は3月下旬から10月下旬まで出現し、6月から9月にかけて *A. jap.* にかわり優占位を占める。*A. albo.* は4月上旬から10月下旬まで出現し、*A. flav.* とほぼ同じ出現相様を示す。*A. flav.* と *A. albo.* が混棲する水域は全期間を通じて1個もなく、両種間に明瞭な“すみわけ”があるとみなされる。

(京府医大・医動物)

京都市における蚊帳使用状況調査について: 折井健

Orii, T.: A report of survey on the using status of mosquito net in City of Kyoto

京都市における1957年度の蚊帳使用状況を調査し、これを地図上に表現して、1955年度の調査成績と比較検討した。各保健所管内別の蚊帳使用率は1955年度で

は最低27.2%(下京)、最高91.4%(伏見)であつたが、1957年度は最低18.2%(上京)、最高81.2%(伏見)であつた。1957年度の成績では、上京、中京、下京、東山は30%以下、北、左京、南は40～50%、右京、山科、伏見は70%以上の3群に分けられ、学区(小学校の通学区)別使用率の各保健所管内別度数分布も3群に相当する“ばらつき”の差が認められた。学区別使用率を、0～20%、20～40%、40～70%、70～100%の4段階に分けて、地図上に塗り分け、1955、1957両年度の使用率の分布図を作つた。これらを比較した結果両年度とも中心部では低率で周辺部になるに従つて高率になるが1957年度は1955年度に比して、低率(0～20%)地域の大幅な拡大が認められた。上述の3群に相当する地域は、夫々水田地帯と市街地の構成関係に差異が認められ、また、人口密度と使用率との間には逆相関($\gamma = -0.70$)、水田面積百分率と使用率の間には順相関($\gamma = 0.68$)が認められ、同一人口密度の地域では水田面積百分率の大なるものが使用率も大きいという傾向が認められた。従つて市の周辺部及び周辺に近い地域は、高度に水田性の蚊の影響を受けていると推定される。以上のことから、都市における蚊防除方針を、従来の如く、下水溝や家屋内外の小発生源等に重点をおいて運営するならば、都心部では成功しても、周辺部では十分な効果を期待出来ないわけで、少なくとも京都市においては水田対策が蚊の防除上重要な課題であることを示している。

(京都市衛生害虫研)

草地の蚊類群集の生態学的研究(III): 中尾舜一 Nakao, S.: Ecological studies on the adult mosquito communities in the grass. III

(1) 草地と畜舎の日中蚊類密度の比較 前2回の報告で、蚊特に *Anopheles h. sinensis* の日中潜伏場所として草地が重要であることを述べたが、更に今回は、筑後川流域で畜舎と草地の日中潜伏蚊の密度を調査し比較した。方法としては種々の角度より考えた結果5分間の sweeping 法を用いた。時期は7月中旬より8月下旬にわたり、10時より12時の間の調査した。その結果各調査個所の密度は、その附近の総発生源やそれぞれの草地、畜舎の条件の違い等によつて相当な変動があるが、同一個所で筑後川堤防をはさんで対応している畜舎と草地であれば、*Culex tritaeniorhynchus*, *Armigeres subalbatus* は畜舎で密度が高く、*Anopheles h. sinensis* は草地で密度が高いことが明白となつた。この事は蚊の日中潜伏場所選